

生活の中のディマンズへの疑問からニーズとケアを導く 教材開発と教育方法の報告

—介護福祉士養成課程の教科「介護過程」を学ぶ学生を対象として—

渡邊祐紀^{*1}・天野由以^{*2}・高橋真理子^{*3}・荒川典子^{*4}・結城拓也^{*5}

**Report of a Teaching material development and its educational effects, which supports
Students guess about needs and care with the questions why the elderly express such
demands in life.**

—to grow up students studying [Caring Process] in new training curriculums of care worker—

Yuki WATANABE^{*1}, Yui AMANO^{*2}, Mariko TAKAHASHI^{*3}, Noriko ARAKAWA^{*4} and Takuya YUKI^{*5}

〈抄録〉

支援者は利用者のディマンズを発端に、アセスメントを深め、ニーズに基づいたケアを実践する必要がある。本研究は、介護福祉士養成課程で学ぶ学生7名を対象に、利用者の生活の中のディマンズへの疑問から、ニーズとケアを導く思考過程を支えるため、ニーズ等の言葉の定義と関係性を整理し、概念モデルと教材の開発、教育方法を検討した。「介護過程」の授業と実習で活用した結果、学生はニーズとディマンズ等の意味と関連性をほぼ理解し、ディマンズへの疑問からニーズを推測し、ケアの実践に至った。開発した教材は言語表現が難しい認知症の人等への支援にも活用可能であったが、①アセスメント方法への倫理的検討、②事前に学習した知識を活かした疑問を持つ、③ニーズや目標に支援方法を記入しない等、重点的な指導点が挙げられた。概念モデルと教材に「目標」「本人や家族なりの解決方法（努力）」「優先順位」欄を追加する等の改良を加え、検討を重ねたい。

Key words：ニーズ、ディマンズ、介護過程、教材開発、ICF

I. はじめに

利用者が「もう食べたくありません」と食事を終えることを要求した時、介護福祉士養成課程にある学生（以下、学生とする）も含め、全ての支援者はその要求を鵜呑みにし、即座に食べ途中の食器をテーブルから下げることにはしない。「もう食べたくありません」はディマンズであり、本心であるニーズは別にあると理解している

ためである。支援者はディマンズをきっかけに、日常の関わりの中から「健康を保つために適切な量を毎日おいしく食べたい」「落ち着いて食事に集中できる環境で食べたい」などのニーズがあるのではないかとアセスメントを深め、本人が希望する生活に近づくケアを展開している。

多くの支援者がニーズとディマンズについて、両者が必ずしも一致しないことを経験的に理解しているにも関わらず、介護保険制度のケアプランを記入する居宅また

*1 東海大学健康科学部社会福祉学科（Department of Social Work School of Health Sciences Tokai University）

*2 目白大学人間学部人間福祉学科（Department of Social Welfare Services Faculty of Human Sciences Mejiro University）

*3 日本社会事業大学（Faculty of Social Work Japan College of Social Work）

*4 目白大学短期大学部生活科学科生活福祉コース（Social Welfare course Department of Living Sciences Mejiro University College）

*5 社会福祉法人仁愛会（Social welfare cooperation Jinaikai）

は施設サービス計画書標準様式ではニーズが「生活全般の解決すべき課題（ニーズ）」として表現されるにとどまり、支援者がアセスメントした内容からニーズを推論・決定した経緯を記入する欄は設けられてない。ニーズやディマンズの関係性の解説や、ディマンズからニーズおよび求められる支援を導く思考過程を支える教材（佐藤、2008：諏訪、2007）は非常に少なく、ディマンズからニーズを導く過程の可視化や妥当性の検討が不十分なため、支援者の価値観等の影響を強く受ける可能性がある。

介護福祉士の資格取得を目指す学生が介護計画の立案やケアマネジメントについて学ぶ科目「介護過程」は、2009年度より始まった介護福祉士養成課程新カリキュラムの新規科目であるため、現段階では「介護過程の教育方法」「介護過程を展開する際の思考過程」「実習での介護過程の展開方法」（森、2009：末廣、2007：木村ほか、2008）など、介護過程を辿る支援者の思考過程や授業および実習での展開方法に着目した研究が多く、アセスメントをもとに利用者のニーズを推測する過程に焦点を当てた論文はほとんど見られない。教科書等の書籍においても生活上の課題やニーズやディマンズを解説する頁が非常に少ない（石野、2009：佐藤、2009）のが現状である。

また、現在の学生は「指示待ち」「定型的な仕事しかこなせない」（川廷、2008）と指摘されるように、能動的に自分の人生について決定する等の生活経験が乏しく、さらに介護福祉士や介護自体のイメージが明らかに描けていない時期にある。そのため、教員は、実習指導の科目内および実習巡回中に、介護はアルバイトとは異なり、利用者や実習指導者からの指示を言われた通りにこなすだけでは不十分であること等を指導している。したがって、学生にとっても、利用者のディマンズを発端に、自分自身で利用者の現状に疑問を持ち、疑問を確かめる方法を幅広く考え、利用者の本心であるニーズと求められる支援を導く能力を高める必要があり、その過程を支援する授業・実習用の教材開発は急務と言える。

そこで、本研究は介護福祉士養成課程の学生がディマンズへの疑問からニーズを明らかにし、求められる支援を導き実践する能力を高めるために、①先行研究等からニーズとディマンズの意味と関係性の整理を行い、②ディマンズからニーズと求められる支援を導く概念モデルと教材を作成し、③「介護過程」の授業と介護実習中に教材を活用した結果から、効果的な教育方法の考察を目的とする。

Ⅱ. 対象と方法

1. 対象者

対象は東京都内の A 短期大学にて、介護福祉士養成課程に在籍する学生 7 名（研究開始時の 1 年生全員）と授業および実習中に指導を担当した教員 3 名とした。

2. 方法

2009 年 7～9 月に、（1）書籍・先行研究等から、ニーズとディマンズに関する概念を整理し、（2）概念モデルを作成し、教員間の検討を経て共通理解を得た。その後、（3）概念モデルに基づく実践を支える教材と授業案を作成し、教員らで試用と改良を行った。教材は、2009 年 10～2010 年 1 月の（4）教科「介護過程 I」（1 年次秋学期）の授業内と、2010 年 2 月と 2010 年 8 月の（5）介護実習（各 4 週間）中に学生が担当させていた利用者の介護計画を立案する際に利用した。2010 年 8～10 月に、（6）学生と巡回を担当した教員の意見を自由記述で収集した。分析方法は、授業内で演習の成果物と実習中の成果物と自由記述の意見について、記述内容を質的に分析した。

3. 倫理的配慮

学生には教材開発の協力依頼と研究目的を説明し、協力と了解を得た上で実施した。分析も学生の氏名や実習施設および担当の利用者が特定されない状態でを行った。

Ⅲ. 結果

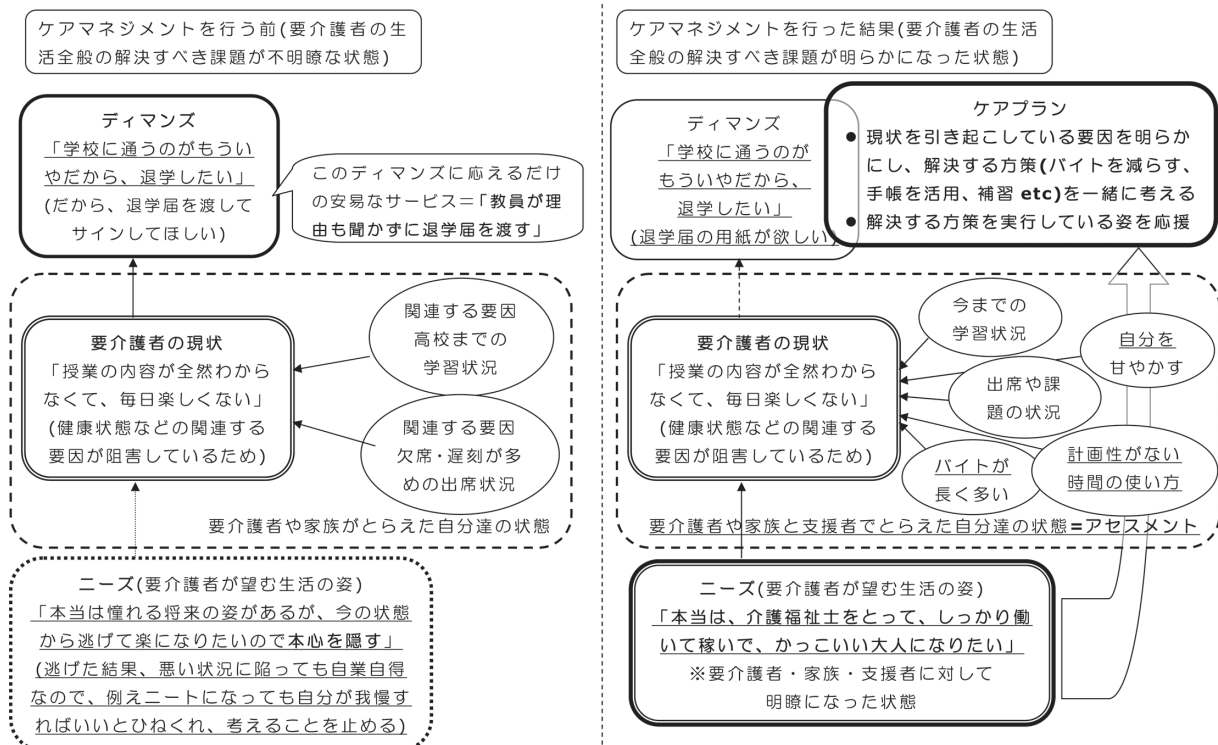
1. ニーズとディマンズの意味の整理と定義

ニーズは「生存や幸福、充足を求める身体的・精神的・経済的・文化的・社会的な要求という意味で、欲求、必要、要求などと訳される」（狭間、2010）であり、ディマンズは「高齢者が欲する要求で主観的性質を持つもの」（諏訪、2007）と定義される場合が多い。しかし、実習場面にいる学生がこれらの定義に基づいて欲求と要求の意味の違いを理解し、現状を整理しながら実践に結びつけることは非常に難しいと考えられた。よって、ニーズとディマンズは新英和中辞典（第 7 版）と OXFORD 現代英英辞典（第 7 版）に基づき、英語の原文に筆者らが学生に理解しやすいように意識を添え、次のように定義した。（英文中の S は文章の主語または目的語の意で用いた）Needs は日本語では欲求・必要・要求・需要と訳され、意味は① [N] the things that S

requires in order to live in a comfortable way or achieve what they want (快適に生きるため、または成し遂げたいことを実現するために、利用者が必要としているもの、② [N] A strong feeling that you want S or must have done (利用者がある物事を欲する、またはある事が成し遂げられるべきだと考える強い気持ち)、③ [V] to require S because they are essential or very important, not just because you would like to have them (単に利用者が手に入れたらという理由だけではなく、本人にとって欠かせない、またはとても重要なため、利用者がある物事を必要とすること)である。Demands は要求・需要と訳され、意味は① [N] a very firm request for S (利用者がある物事を強く要求すること)、② [N] things that S makes you do, especially things that are difficult, make you tired, worried, etc (利用者が支援者にやってほしいこと、特に難しいこと、くたびれること、心配なこと等)、③ [N] the desire or need of customers for goods or services which they want to buy or use (利用者が購入または使いたい品物やサービスを、願望または要望すること)である。

また、ニーズを「必要」と訳し、「利用者が本当に必要としている客観的なもの」と定義した場合に、デザイ

アはそれを本人が自覚した範囲での欲求であり、デマンドは口で表現された要望とされ、専門職者がとらえたニーズとは当初一致しないことが多いため、真のニーズに迫り共通認識としていけるよう働きかけることが求められる(田中、2008)とされる。これについても、自立支援の概念がまだ十分に浸透していない時期の学生によく見られる介護観が「なんでもかんでもやってあげること」(渡邊、2008)であり、自分と比較してできないことが多く弱者である利用者に「～してあげる」ことが支援者の仕事と考え、無意識に近いとはいえ自分が描く高齢者像やこうあるべきと考える生活像に利用者を当てはめる可能性や、利用者と支援者との関係性に強弱をつける危険性が高い。そのため、学生が利用者の立場に近づき、ニーズを中心としたケアを展開するにあたり、利用者と家族が現状に関連する要因を自分達なりに整理し、解決策を考え、支援者にその一部をディマンズとして具体的に依頼している状態そのものの理解から始めるべきと考えた。最初に利用者と家族がとらえた現状を理解することで、利用者らと支援者が共通理解のもと対等な関係になり、利用者らがまだとらえきれていない関連要因のアセスメントを深め、現状整理とニーズを明確にする過程を通し、同じ方向性に立ち本当に必要な支援を実践



要介護者=学生、支援者=教員として、学生にとって身近な題材を例として記入し、学生には授業内で解説を行った。
 出典: 渡邊祐紀: 第12章介護過程。(社会福祉士養成講座編集委員会編)新・社会福祉士養成講座13 高齢者に対する支援と介護保険制度—高齢者福祉論第2版: 327-329, 中央法規出版, 東京(2010).より一部改

図1 ケアマネジメントや介護過程を通して支援する利用者の「ニーズ」と「ディマンズ」の関係性を表した概念モデル

表 1 デイマンズを発端に、ニーズとケアを導く過程を支援するワークシート

作成者: _____ 作成日: _____

利用者の「デイマンズ」をきっかけに「現状と関連因子」を整理して、「ニーズ」に基づいた「ケア」を導くシート

利用者の(と家族)のデイマンズ:
「不安・心配・困りごと」や「解決のため支援者に依頼したい内容と方法」

利用者と家族と支援者がとらえた現状:「参加」と「活動」を促進or阻害している関連要因とその関係性

「参加」と「活動」に作用している関連要因を明らかにするための「疑問」・「調べる方法」・「調べた結果」

「現状に対するさるなる「疑問」
健康状態と心身機能・身体構造に関して

環境因子(支援者・支援も含む)に関して

個人因子に関して

これまでに把握した「本人の事実」
「健康状態」と「心身機能・身体構造」

「環境因子」

「個人因子」

利用者の(とその家族)のニーズ:関連要因を整理・解決しながら目指す「希望する(具体的な)生活の姿」や「希望する(具体的な)自分の状態」

ケアプランの概要

ニーズを実現するための目標(短期&長期の到達点)を設定し、目標に近づくためのケアのアイデアを、明らかにした関連要因にそって導き出す。緊急性・実現可能性等から優先順位を考え、採用or不採用(延期)を決定する。本人の事実と生活機能の状態でそった具体的な支援の内容と方法は、アセスメントとケアプラン作成シートに記入

ニーズに近づくための目標の設定

58

東海大学健康科学部紀要

する経過を辿ることが、ニーズの理解や実現に向けた両者の意欲を高める可能性が高いこと、ケアプラン提示までの作業にかかる時間等の効率からも適切と考えた。

2. ニーズとディマンズに関する概念モデルの作成

ニーズとディマンズ、アセスメントと介護計画等の語句の意味と関係性の理解を深めつつ、現在の状況とディマンズの背景にある関連要因を明確にする過程で、利用者自身にもニーズが明確になり、ニーズに近づくための目標と関連要因への対策を含めたケアプランを支援者が提示・説明し、理解を得て支援が可能となることを示す概念モデルを、教員らで作図・検討した(図1)。

概念モデルは支援者が関わる前と後の状態を左右で対比させ、左側の支援者が関わる前の図では、「ディマンズ」を一番上に配置し、それらを生み出している「要介護者の現状とその関連要因」を包含した枠組み、その下にまだ要介護者も意識できていない可能性が高い「本人が望む生活の姿」すなわち「ニーズ」欄を設けた。支援者が関わった後の状態を右側に添え、左の図に比べて、現状を引き起こしている要因がより明らかになり、関連要因が整理されたためニーズが本人・家族・支援者に明らかになり、関連要因を踏まえたケアプランが提示された状態を示す枠組みが追加されている。なお、本人や家族が自分達で現状を分析して考え出した解決法がニーズを実現する方策として適切な場合があること、支援者の姿勢として利用者のディマンズや自分なりの課題解決への努力を受容する必要があることから、ディマンズとニーズを明確にした後に導かれるケアプランの枠を一部

分重ねた。概念モデルへの理解を深める目的と、アセスメントとケアプランを立案する思考過程が利用者のみならず自分を含めた全ての人の支援に当てはまることを示すために、左右の図中には学生にとって身近な例を添え、「介護過程Ⅰ」の授業内で提示・解説を行った。

3. ディマンズを発端にニーズを理解するための教材の作成

概念モデルを理解した学生が、実際に把握した情報からニーズやケアを導く能力を高める過程を支援する教材として、概念モデルと類似した枠組みを持つ「利用者の『ディマンズ』をきっかけに『現状と関連因子』を整理して、『ニーズ』に基づいた『ケア』を導くシート」(以下、シートと略す)を作成した(表1)。

シートの左側には上部にディマンズ欄があり、その下に「要介護者の現状とその関連要因」と「ニーズ」を記入する欄、右列にケアプランの目標とプランの詳細を記入する欄を設けた。なお、「要介護者の現状」にはICFの生活機能の視点をを用いた分析を促すため3側面のラベル、「関連要因」には記入者の抱いた疑問とその疑問を明らかにするために記入者が考えた調べる方法とその結果を添える欄を設けた。

これらの枠組みによって、シートは①概念モデルに酷似した外観が記入者にニーズ等の意味や関係性の理解から逸脱せずに考えを深めさせる、②現状と関連要因を整理する側面として国際生活機能分類の生活機能(以下、ICFとする)の視点をを用いることで観察者と対象者が対等な関係を構築できる、③『現状』の「健康状態と心身

表2 【介護過程Ⅰ】(30時間, 15回)の授業計画(概略)

科目の 学習目標	個別の介護方法を教えてもらうのではなく、利用者の状態をアセスメントし、自分で導く思考過程を理解し、実習で介護過程を展開できる状態を目指す		
第1回	- シラバスの理解 - 介護過程とは何かの理解	第10回	曖昧に伝える日本語と確実に伝わる日本との違いについて
第2-3回	介護場面の根拠となる事実と判断と行動の関係性を、実演しながら理解する演習(介護過程の用紙の理解も深める)	第11回	- 生活の幅広さの理解(自分の理解の幅や深さの自覚) - 生活への注文であるディマンズとニーズの関係性の理解
第4-5回	考える材料である「事実」を書きとる能力を高める(演習)	第12回	ディマンズを発端に、疑問を持ち、ニーズを推測する演習
第6回	事実が私たちに教えてくれる多くのこと(事実の意味の解釈)	第13回	第12回の演習内容の発表会(冬休みの宿題の練習問題)
第7-9回	実際の支援の場面から介護過程を理解する(利用者役と支援者役の演技から、支援者の思考過程を読み解く演習)	第14-15回	- 第13回の発表会への教員からのコメント - 模擬利用者の事実に基づいた介護過程の展開(演習)

表3 ワークシートを用いて演習を行う第12回授業の授業案（概要）

前回までの授業の流れ	第10回までの学習内容の確認、第11回では、「介護過程を展開する前にそもそも『生活』とは何を含むのか?」の自分の考えの自覚、生活への希望を「～したい」の形で表現するワークを通して、生活の幅広さと個性と継続性の重要性を理解した		
この授業の学習目標	- ニーズとディマンズの意味と支援との関係性を、モデル図を通して理解する - 例題を通して、ワークシートの各欄への記入すべき内容や活用方法を理解する - ディマンズや生活への疑問からニーズを推測し、ケアプランとして解決法を考え出せる		
00:00-00:05	出欠と学生の様子の確認	00:45-01:00	短いシナリオで提示したディマンズと参加と活動の状態から、ニーズを明らかにするための疑問と疑問の解決方法を考え出すワークの導入
00:05-00:15	前回までの学習内容の復習		
00:15-00:25	「エアコンをつけてー」と言う利用者がいたら自分はどうするのか?のミニワークと共有	01:00-01:25	チームに分かれ、シナリオを選択し、チームごとに進める
00:25-00:45	「エアコンをつけて」を例に、ニーズとディマンズのシートの理解と各欄への記入内容等の解説（ニーズや目標も）	01:25-01:30	ワークの提出期限の確認 次回の発表会と討議内容の予告 本日のまとめ

機能と身体構造」「環境因子」「個人因子」に対し、『活動』と「参加」を促進・抑制している関連要因とその関係性』欄に、記入者自らの「疑問」と疑問を「調べる方法」および「調べた結果」を記入するため、疑問等の記入量の違いが記入者へ幅広い情報収集を促す役割を果たす、④ディマンズや現状には判断材料の「利用者の言動の事実」等を記入する等思考過程が可視化され、他者が確認・検討できる等の特徴を持つ。

4. 授業内でシートを活用した学生の記入内容から

「介護過程Ⅰ」の全15回の授業計画の概要を表2に示した。

第12回の授業にて、ニーズとディマンズの意味やモデルおよびシートの枠組みを解説した後、「もう食べませんので、お食事を下げてください」等の短いシナリオで表現したディマンズに対する疑問と疑問を明らかにする方法を挙げる演習を行った。第12回の授業案は表3に示した。

初めて出会う利用者など事前情報が全くない状態からの支援も考えられこと、自由な発想で幅広い疑問を持つことをねらいとしたため「現状」は空欄とし、「疑問を調べた結果」はチーム内で仮定し、ニーズと目標と支援を記入した。

学生の成果物の全体的な傾向として、語句の意味やシートの枠組みはほぼ理解し、「歯や義歯の調子はどうか」「起きてすぐではないか」「体調が悪いのではないか」「周囲が煩いのではないか」など「現状への疑問」に対し、「本人に聞く」「本人の隣に座って観察」「歯科衛生士に見てもらおう」「夜間の様子や起床時間を調べ

る」等の「疑問を調べる方法」も数多く挙げていた。しかし、「ニーズ」に本人の希望や状態ではなく、「時間をずらす」「テレビを見る環境を整える」「お一人様席を作る」など具体的な支援を記入する傾向が強く、目標にも同様の傾向が見られた。そのため、学生には第14回授業でコメントを伝えるとともに、教員間で実習に向けて重点的な指導のポイントとして共有した。

5. 実習中にシートを活用した学生の記入内容と自由記述から

実習の継続が困難であった1名の学生を除いて、学生全員がシートを活用し、推測したニーズを基に介護計画を立案し、支援の実践と評価までを実習期間内に実施した。紙面の都合上1例のみになるが、学生の記入例を表4に示す。

学生が担当した利用者のディマンズは「お墓参りがしたい」「娘や息子に会いたい」であったが、学生が現状に対する疑問を調べた結果「3か月前に入居した」「娘や息子が大好き」「油絵の先生だった」「家事が得意である」等がわかり、ニーズを「施設の生活に慣れていないので、家族に会って安心したい」「今まで続けていた趣味を続け、楽しく暮らしたい」と推測した。ニーズに近づく目標として、短期目標に「余暇時間の充実」、長期目標に「快適で安心した生活をおくる」を設定し、目標に近づく支援の一部を、実習指導者と利用者の許可を得て実施した。学生が立案した介護計画であり、目標や介護計画の内容に実現可能性の制約があるものの、「お墓参りがしたい」というディマンズを実行に移すのではなく、その背景にある利用者の「家族に会えないさみし

表4 実習にて学生が使用したワークシートの記入例

利用者の「ディマンズ」をきっかけに「現状と関連因子」を整理して、「ニーズ」に基づいた「ケア」を導くシート

作成者:

作成日:

利用者と家族のディマンズ:
「不安・心配・困りごと」や「解決のため支援者が必要」という内容と方法

利用者(と家族)のディマンズ:

- お墓参りがしたい(実の父親のお墓)
- 娘さんや息子さんに会いたい

これまでに把握した「本人の事実」

「健康状態」と「心身機能・身体構造」

- ・故障や体の痛みどころはない
- ・杖を使っているが歩行は可能
- ・居室横のトイレまでは杖なしでも可
- ・声をかけると笑顔で話してくださる
- ・食事も自分の力で食べている

「環境因子」

- ・面会はあまり来ない
- ・6月に入居(要項は8月)
- ・他利用者に好き・嫌いがある

「個人因子」

- ・絵や塗り絵が好き
- ・刺子が得意

現状に対するさらなる「疑問」

健康状態と心身機能・身体構造に関して

- ・病気はないのか?
- ・杖はどんな杖か?
- ・歩行時の様子は?
- ・気分や情緒に日々変化はあるのか?
- ・はしやスプーンを使えているのか?

環境因子(支援者・支援も含む)に関して

- ・家族はいるのか? どこにいるのか?
- ・なぜ面会に来れないのか?
- ・どのような利用者さんに好き・嫌いがあるのか?

個人因子に関して

- ・絵の仕事をしていていいのか?
- ・なぜ絵を描き始めたのか?
- ・手先が器用なのは昔から?
- ・家事をしていたから?

「参加」と「活動」を促進・阻害している関連要因とその関係性

「参加」と「活動」に作用している関連要因を明らかにするための「疑問」「調べの方法」「調べた結果」	疑問を「調べの方法」のアイディア」	「調べた結果(わかかったこと)」
本人の記録を見せてもらい 歩行時の利用者さんの様子をよく見る 一緒に歩いてみる 毎日日本人と接するようにし、変化を見る 食事中の様子を見る	・ADL自立している ・既往歴にある症状は今も出ていない ・歩行時には杖はあまり見られない ・小股ではあるが、ゆっくりに歩くことができる ・だいたはおどやかで人に気を遣う性格 ・はし、スプーンを使うので手先は器用	・2回離婚している ・姉や兄の子供は大好きで、写真もある ・息子さんはK市にいる。仕事のため忙しい ・どなたにも暴力をふるう人は嫌いだ ・優しく接してくれたら、気を遣ってくれる人は好き
本人に聞いてみる 職員さんに聞いてみる	・昔・油絵の先生をしていた ・20代で結婚し ・その後喫茶店をしていたこともあったため、家事が得意	

利用者(と家族)のニーズ・関連要因を整理・解決しながら目指す「希望する(具体的な)生活の姿」や「希望する(具体的な)自分の状態」

- 施設の生活に慣れていないので、家族と会って、安心したい
- 今まで続けてきた趣味を続けて、楽しく過ごしたい

注)実物は手書きであるため、筆者が実物のオリジナリティを損なわないように複製した

さ」や「慣れない環境の中で暮らすことに対する『安心したい』』というニーズに辿り着くことができた。

シートを利用した学生からの実習後の意見は、「現状に対する疑問のスペースが狭い」「ニーズに近づくための目標の書き方がよくわからない」等が挙げられた。

6. 実習の巡回を担当した教員の自由記述から

教員の自由記述の意見からは、「ディマンズと活動と参加の事実」欄や「現状と現状への疑問と調べる方法」欄について、「ケア・状況を思い起こさせるエピソードを話しながら引き出せる」「観察した内容をそのまま分類して記入するので整理しやすい」など、客観的な事実を利用する利点が挙げられた。また、全体的に「主観的な思いを基準とせず、事実を積み上げた分析になる」ため、「事実に基づき独りよがりにならない」「支援が一般論にならない」が挙げられた。

シートの枠組みや理論的背景について、「矢印にそって、行き来しながら、理解を深められ指導しやすい」という意見の一方で、学生に「介護過程の授業やICFの言葉の理解がないと記入が難しい」「思考過程を理解できないとラベルに左右され、わからなくなる場合がある」など、より多くの学生が理解を深められる授業改善が求められた。

シートの特徴でもある「情報が足りない所を視覚的に確認でき、わかったつもりを回避できる」利点が挙げられたが、「シートを埋めなきゃ!と焦る学生に、バラバラに考えるのではなく、関連性や意味の読み取りが重要であることを気付かせる指導をした」「疑問を持つ・方法のアイデアを考えるのが苦手な学生がいる一方で、疑問が疑問を生んで混沌としてしまう学生もいた」等と論理的な思考過程に困難感を示す学生も存在し、在学中に繰り返し指導する必要性が指摘された。

IV. 考 察

1. 学生が授業と実習中にシートを通して学習した内容

シートを用いた学習の結果、学生は①ディマンズの鵜呑みはケアとして不十分であると理解し、②ニーズを明らかにするための現状に対して疑問を持つ能力や③疑問を明らかにするアセスメント方法、すなわち日常の中で着目すべき瞬間や把握する手段を考える能力の必要性を理解した。また、実習の段階が進むと疑問の数が増え、内容も深まり、ニーズの推測や計画の立案・実践への取り掛かりが早まる傾向も見られた。以上のことから、シートが教材として、ディマンズを発端にニーズやケア

を導く過程を支える役割を一定以上果たしたと考えられた。

2. 学生が実習中に行ったシートの利用方法の工夫

学生が担当した利用者からは、認知症の症状を有するため言語での表現が難しい場合や希望を聞いても「特にない」等の返答を得る場合が多かった。言語による表現が難しい場合、学生は「ディマンズの元となる『参加』と『活動』の大まかな事実」に記入した言動の事実の意味を解釈し、ディマンズ自体を推測・仮定しながらニーズの推測を進めていた。これによって、言語表現が難しい場合や認知症を持つ人の支援の立案にもシートが有効活用できる可能性が示唆された。また、表現されたディマンズと活動と参加の事実から解釈された内容の違いは、現状への疑問を抱かせる重要な情報源となるため、学生が観察した事実を十分に引き出す指導が重要となる。

3. シートへの記入内容から挙げられた指導上の留意点

3.1 アセスメント方法に対する倫理的検討の必要性

学生が利用者の現状に対し、「食事の席の環境が影響している可能性があるのではないか？」と疑問を持った場合に、調べる方法として「許可をもらい、いつもと違う席にしてみる」を挙げた。今回の疑問と調べる方法は、ただちに利用者の不利益には繋がるものではなかった。しかし、利用者の情報を把握する必要であるとはいえ、専門職であるからこそ支援やアセスメント方法に「社会倫理性にのっとっているかどうか」の確認（小野寺、2007）を済ませた上での実践が求められる。今後、支援者が必要性があると考え実施した言動だとしても、他者に危害を加えないこと等、常に倫理的に認められる範囲を超えないよう確認しながらアセスメントを行う重要性を伝えるべきである。

3.2 事前に学習した知識を活かした疑問を持つこと

学生が抱いた疑問は、「体調が悪いのではないか」等の人が他者を心配し気遣う程度の範疇のものが多かった。本人の疾患や生活機能の状態等、様々な科目で学習した知識を活かした幅広い疑問を持つためにも、学生が獲得した知識を実際の生活や人と結びつけ、有効に活用する面白さの体験を積むことができる指導・機会を増やしたい。

3.3 ニーズや目標の欄に支援方法を記入する傾向

実習後の学生の意見からも「目標の書き方がわからない」と挙がったように、ニーズや目標の欄に「支援者が

すべき、してあげたいと考えたと思われる支援内容と方法」を記入する傾向が見られた。この背景には、①概念モデル内に目標がなく、概念の理解がまだ浅いこと、②「自分達のこう在りたい姿」を描き、目標を設定し、計画を立てながら生活した経験の乏しさ、③人の役に立ちたいという強い思いや承認欲求のため、他者の目指す状態を挙げるより、自分のすべきこと等を記入し、安易に有能感を得ようとした可能性等が考えられた。②③については、学生が支援者となる前に、将来像にむけて自分を計画的に育て、自尊心のある自立した大人へと成長を促すため、個々の学生の成育歴などを把握し慎重に指導したい。また、①目標の意味の定義について、ニーズを意欲とした場合に、生活上の課題が長期目標、その過程を短期目標（佐藤、2008）とする考えなど諸説あるが、検討を重ね、基本的には現状からニーズの状態に至るプロセスのある時点の状態が長期および短期目標であることを明確に示していきたい。

4. 概念モデルおよびシートへの改善案

改善案として、まず前述の「概念モデルへの『目標』の追加」と実習中の学生が推測した複数のニーズごとにシートを使い分けたことから「優先順位の記入欄を設ける」の2点が挙げられた。また、学生が指摘した課題である「現状に対する疑問のスペースが狭い」について、シートを複数枚に分割した場合、事実を積み上げて推論する思考過程が分断される等、一覧で見渡せる利点が損なわれる可能性が高いため、改良を見送った。

実習後の教員の意見「ケア・状況を思い起こさせるエピソードを話しながら引き出せる」のエピソードには、全てが適切な方法であるとは限らないが「利用者が自分なりに考えて既に実践している課題解決に向けた努力」が含まれた。このことから、概念モデルとシートのディマンズ欄の隣に「本人や家族なりの解決方法（努力）」欄を追加する必要があると考えた。「利用者は、支援者に全面的に依存するのではなく、自ら考え努力する存在」との理解を、記入者に促す役割を教材にも持たせたい。言葉の定義は、「利用者や家族が課題解決につながると考えた方策のうち、既に取り組み始めているもの」とし、注釈は「ディマンズと同様に、解決策として適切ではない内容・方法を含む場合がある」とする予定である。

V. 結 論

本研究では、学生が生活の中の利用者のディマンズに

疑問を持ち、疑問を明らかにしながらニーズを推測し、支援を実践する能力を高めるための概念モデルとシートを作成し、教育方法を考察した。

その結果、シートは一定の役割を果たし、言語表現が難しい利用者や認知症の人など言動の意味を解釈しながら実践する支援にも活用できる可能性が示された。今後は、①アセスメント方法には常に倫理的な検討を行う、②学習した知識を活かした疑問を持つ、③ニーズと目標に支援方法を書く傾向の修正等を重点的な指導内容とし、概念モデルとシートに「目標」「優先順位」「本人と家族なりの解決方法（努力）」欄を追加する等の改良を加え、本学の教科「介護過程」や介護福祉現場実習および実践現場での活用を視野に入れ検討を重ねていきたい。

謝 辞

本研究にご協力くださいました A 短期大学部生活科学科生活福祉コース 3 期生 7 名の学生の皆様に深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 佐藤信人（2008）：ケアプラン作成の基本的考え方、中央法規出版、pp.40-50.
- 2) 諏訪さゆり（2007）：ICF の視点を活かしたケアプラン実践ガイド、日総研出版、pp.168-176.
- 3) 森和子（2009）：介護過程の教育方法—モデルを活用した授業展開—、高田短期大学紀要、27、49-58.
- 4) 末廣洋子（2007）：介護過程教授の方法について（2）—介護実習記録物の指導を通して—、山口芸術短期大学研究紀要、39、41-57.
- 5) 木村暢男、小林明美、野方円ほか（2008）：基礎教育における介護の専門的思考の発達過程—介護過程にみられる嗜好の特徴—、聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要、6、61-66.
- 6) 石野育子（2009）：第 2 章Ⅱ生活上のニーズ、石野育子（編）、最新介護福祉全書 7 介護過程、メヂカルフレンド社、pp.20-25.
- 7) 佐藤富士子（2009）：第 2 章第 2 節 4 課題の明確化、介護福祉士養成講座編集委員会（編）、新・介護福祉士養成講座 9 介護過程、中央法規出版、31.
- 8) 川廷宗之（2008）：第 2 章介護福祉士養成教育に入る前に、川廷宗之（編）、介護教育方法論、弘文堂、31-36.
- 9) 狭間香代子（2010）：ニーズ、山縣文治、柏女霊峰（編）、社会福祉用語辞典第 2 版、ミネルヴァ書房、286.
- 10) 前掲 2）、63-64.
- 11) 田中典子（2008）：第 3 回目「ニーズの捉え方」と「真のニーズ」、訪問介護計画書作成の手引き、395、8-11.
- 12) 渡邊祐紀、天野由以（2008）：第 8 章第 1 節「介護過程」をどう教えるか、川廷宗之（編）、介護教育方法論、

- 弘文堂、175-180.
- 13) 小野寺敦 (2007) : Ⅲ4. ケアの基本—行動障害の対応と
支援の基本、長嶋紀一 (編)、基礎から学ぶ介護シリー
- ズ認知症介護の基本、中央法規出版、90.
14) 前掲 1)、79-103.